



SAGA建設技術フェア2022が15、16日の2日間、「建設技術が創る安全・安心なまちづくり」をテーマに3年ぶりに開催された。(公財)佐賀県建設技術支援機構(王丸義明理事長)が主催。ガーデンテラス佐賀ホテル&マリトピアを会場に42団体が出展。建設業関係者や官公庁職員、学生など1500人以上が会場を訪れ、建設業の魅力や最新技術に触れた。

フェアは、建設業界の魅力や社会資本整備の必要性を発信することを目的に、2015年から開催されている。来場者数は年々増加していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で20年、21年と2年連続で中止となった。今年は感染対策を徹底し3年ぶりに開催。事前予約制による入場制限が行われたが、2日間で延べ1500人以上が来場した。

会場では、九州地方整備局や佐賀県の担当者による特別講演や技術者発表などのほか出展団体によるプレゼンテーションも行われた。ブースでは▽環境▽防災▽コスト削減▽維持管理▽ICT▽佐賀の技術の6つのテーマごとに42団体が出展。担当者が新技術や新工法の説明や実演を行い、どのブースでも来場者の質問が飛び交った。

特別講演

国土交通省九州地方整備局企画部

インフラDX推進室係長 猪井 知明氏



■九州地整におけるインフラDXの取り組み

スカイバーチャルツアーなど紹介

6月16日の特別講演では、国土交通省九州地方整備局企画部インフラDX推進室の猪井知明係長が「九州地方整備局におけるインフラDXの取り組み」をテーマに講演した。

猪井氏は「先進国と比べ日本のデジタル化は遅れている」と指摘した上で、「職場のデジタル化が進まない理由として、経営者が必要を感じていない場合が多く、経営者の強い覚悟がないとD

X(デジタル・トランスフォーメーション)は進まない。2025年度までにサポートを終えるシステムもあり、それまでにデジタル化を進めないと時代に乗り遅れてしまう」と話した。

講演では、九州地方整備局のDXを用いた取り組みとして「スカイバーチャルツアー」を紹介。ドローンで撮影した360度映像で作るストリートビューで、大分県と福岡県の県境を流れる山国川や佐賀県の吉野ヶ里歴史公園の事例などを解説し、「上空から自由な視点で地上を見ることがで

きる。また、災害時の被害状況確認などでも使用でき、様々なメリットがある」と説明した。

さらにインフラ分野のDXについても解説し、「デジタル技術を活用した働き方改革で、簡単にアクセスでき、現場にいなくても現場管理が可能になる」と話した。

また、ゲームエンジンを用いたインフラ整備の新たな設計手法として、「メタバース(仮想世界)を用いた川づくり」を紹介。3次元の仮想空間上に河川の整備後の姿を構築し、整備計

画の地元合意などで活用する。

猪井氏は「地元説明などで使用する模型やパースに比べ、コストが低く、工期が短い上に、整備後の河川を体験できるので合意形成に有効。ゲームエンジンは非常に高機能なツールだが、無料で使用でき、意見が出れば、その場で川のデザインに反映することもできる」と説明した。

このほか、手軽にできるスマートフォンを用いた点群計測やクラウドを使った点群処理、共有などの技術も紹介した。

佐賀県地域交流部SAGA2024・SSP推進局

SAGAサンライズパーク整備推進課 整備担当係長(電気) 東 啓一郎氏
整備担当係長(建築) 市丸 雄基氏

■SAGAサンライズパークについて 様々な整備内容を紹介

県では、SAGA2024国スポ・全障スポ開催を契機として、「SAGAサンライズパーク」の整備を行っている。SAGAサンライズパーク整備推進課の東啓一郎係長と市丸雄基係長は「SAGAサンライズパークについて」のテーマのもと、施設内に様々な整備を進めてきたことなど講

演した。

講演のなかで二人は、約8400席の観客席を備えた九州最大級の多目的アリーナである「SAGAアリーナ」や、県産材のウッドデッキを使用したオープンテラスで飲食などを楽しむことができる「パークテラス」、佐賀市文化会館を繋ぐ遊歩道(ペDESTリアンデッキ)などを紹介。「SAGAアリーナ」は各種スポーツの国際



▲東啓一郎係長



▲市丸雄基係長

大会にも対応し、バレーボール【久光スプリングス】やバスケットボール【佐賀ブルーナース】などのプロスポーツ試合も観戦できることを伝えた。このほか、人気アーティストのコンサートなど多彩なイベントを

開催することができると語った。

現在、サンライズパークは工事や周辺道路等の整備などを進めており、来年春にグランドオープンを迎える。